

せきのつじょう

関津城遺跡、

せきのつ

関津遺跡 現地説明会資料

— 宇野氏の館城 —



平成 23 年(2011 年) 1 月 29 日

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

I 関津城遺跡

1. 調査の経緯

財団法人滋賀県文化財保護協会では、大津市関津の関津城遺跡および関津遺跡の近接地において、国道422号大石東バイパス道路改築工事が計画されたことから、平成21年4月から発掘調査を実施しています。

関津の地には、承久3年(1221年)の承久の乱後、佐々木六角氏の旗頭青地氏に属する宇野氏が代々、居城を構えたといわれています。宇野氏は、承久の乱の際、清和源氏の流れをくむという宇野源太郎守治が戦功をたてたことから、恩賞として鎌倉幕府から関津の地を与えられたといわれています。関津の称名寺には、宇野氏の墓と伝えられる五輪塔が残り、大石龍門の八幡神社には、天文9年(1540年)の棟札に「田上関津宇野美濃入道」の名が伝わっていることから、後の子孫も関津に居所を構えていたとみられます。そのため、関津集落を一望する地点に位置する関津城が宇野氏の居城と考えられますが、城の構造、築造時期、存続期間などは不明な状況でした。

2. これまでの発掘調査の状況

発掘調査対象地には、土塁で囲まれた曲輪跡が3ヶ所に残存していました。それぞれ北裾の曲輪を第1調査区、西裾の曲輪を第2調査区、頂部の曲輪を第3調査区、第3調査区の南側の斜面を第4調査区としました。発掘調査面積は約4,700㎡です。

なお、第1・第2調査区については、平成22年8月8日に現地説明会を開催させて頂いております。今回は、第3調査区の曲輪とこれまでの調査で判ったことについて報告します。

これまで、戦国期の城郭を大規模に発掘調査した事例は全国的にも少なく、特に滋賀県内では今回の発掘調査が初めてあり、今回明らかとなった関津城の構造や内容は、今後の城郭研究において一石を投じることとなります。

3. 調査の成果

(1) 第3調査区(頂部の曲輪・主郭)

土塁(上端幅2~4m・基底部幅4~7m、残存高さ約2.5m、推定高さ3m以上)、空堀(幅5m前後、深さ1m以上)、帯曲輪(残存幅1~3m)、曲輪への出入り口、堀立柱建物、礎石建物、土坑などを検出し、礎石建物周辺では土師器の皿、輸入陶磁器、国産陶器などが出土しています。

建物は、建物は曲輪内の南東半部に片寄って配置されており、柱穴と礎石の位置や重複関係から、2ないし3回の建て替え、あるいは増改築が行われていると考えられます。これらの建物は、物見櫓、栈敷や舞台、高樓などであったと推測されます。なお、入り口側の北西半部では、礎石が失われている可能性も考えられますが、空閑地となっていました。

出入り口は、曲輪の北西方向に開口しており、門に伴う柱穴、2回以上の整地面などを確認しています。門は、間口1.8m、奥行き3m規模をもち、その構造は、柱穴と土塁の位置関係から櫓門と考えることが可能です。また、門と帯曲輪の接続部分は、傾斜しつつ一段高く地山が掘り残されていること、この部分から切岸にかけての平坦面が周囲に比べ広がっているなどの点から、入口部分の帯曲輪にも、何らかの構造物が設けられていた可能性が高いと考えられます。

この曲輪は、城内では最も周囲が見渡せる高所に位置し、切岸、空堀、土塁など厳重な防御施設が施されていることから、麓に位置する居館に付設された山城的な機能をもつ曲輪と想定されます。

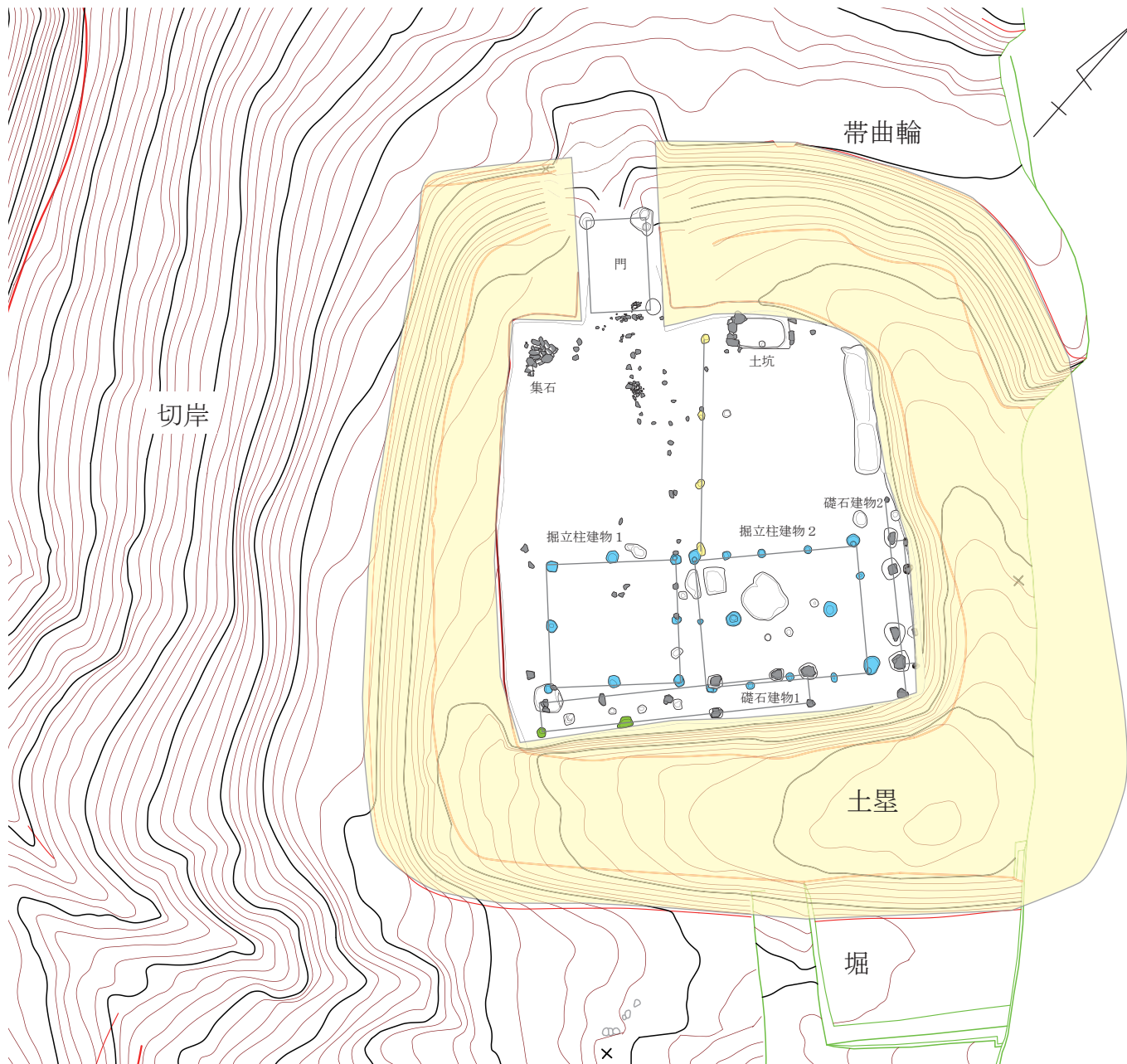


図1 第3調査区遺構図

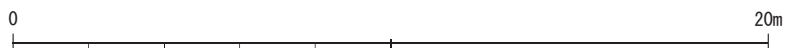


図2 門、建物の推定模式図（西から）

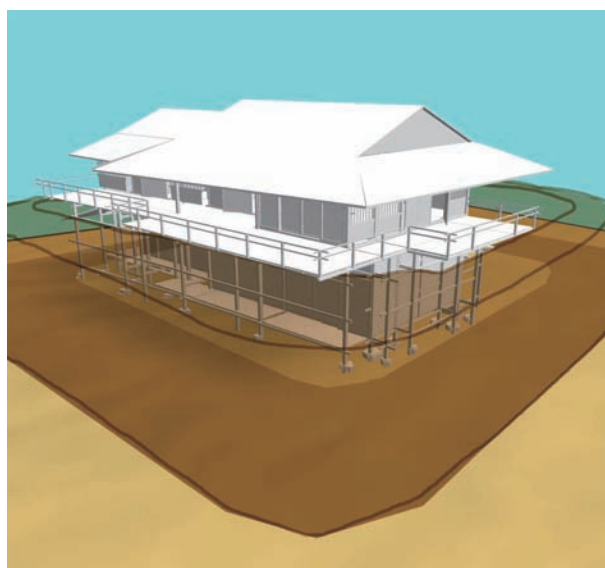


図3 建物の推定模式図（東から）

(2) これまでの調査成果

第1調査区（北裾の曲輪）

土塁とその内側をめぐる排水溝、切岸下端に設けられた排水溝、土坑、井戸などを検出したほか、調査区南西隅に位置する虎口（城への出入口）では櫓台、櫓門に伴う礎石と柱穴を検出しています。

井戸からは、石仏や五輪塔の一部、信楽焼の播鉢や壺などの日常雑器が出土しています。また、櫓台の出入りに設けられた石段には石仏が使用されています。

この曲輪では、建物跡は検出できませんでしたが、出入りに門が設けられており、井戸が設けられていること、出土遺物が日常雑器を主体とするなどの点から、家臣あるいは使用人の居住空間（居館の一部）であった可能性が高いと想定されます。

第2調査区（西裾の曲輪）

西側と北側を土塁、南側と東側を切岸で囲んだ曲輪、切岸の下端に沿って北側の土塁内を削り抜きトンネル状にした排水溝、酒倉、家具調度・武具などを収納した倉庫、厨房施設などの礎石建物、井戸を検出しています。

遺物は、銅製品、武具、鉄釘、漆器、輸入陶磁器など多数出土しています。銅製品は、屏風の押縁や鋌、容器か小型の厨子を飾る飾金具や蝶番、龍形の壺の一部、用途は不明ですが亀形の銅製品などがあります。武具は、鎧の鉄製脇板と小札、輸入陶磁器は中国製の青磁、白磁、染付、天目茶碗、朝鮮半島産の壺など出土しています。また、土師器の皿も多数出土しています。山城からこれだけバラエティに富んだ遺物が出土することは稀です。

この曲輪は、用途が異なる建物が整然と配置され、井戸を伴うこと、出土遺物は日常雑器のとともに高級品や奢侈品が多数含まれていること、未調査の西側部分に主屋建物や庭園の展開が推定可能であることなどの点から、宇野氏の屋敷（居館の中心）であったと想定されます。

第2調査区南東（西裾曲輪の上段部）

地覆石を基礎とし、内法が約4m×3m、厚さ20～30cm、残存高約20cmの土壁が残り、火事により被災した土蔵を検出しています。さらに土蔵内からは大量の炭化した米、少量の麦、数百本の鉄釘が出土しています。

土蔵の構造は、江戸時代の土蔵に近い建築技法であり、このような建物が戦国時代の城郭から見つかった事例は初めてです。また、構造だけでなく収納物が具体的に明らかになったことや城郭内に土壁構造をもつ蔵（倉）が導入されていたことを示す事例としても注目されます。さらにその立地は、麓の集落から見通せるような高所の目立つ地点に位置しており、自らの富や経済力を見せつけることを意図し、敢えて目立つ地点に建てられたと考えることができます。

第4調査区（第2・第3調査区の南側斜面）

この調査区は、現在も調査中のため現段階では詳細を明らかにできていませんが、区画、あるいは城内の通路の可能性をもつ地形、斜面に並行する狭小な平坦面を検出しています。

この調査区は、地形から推測すると建物が展開しない空地である可能性が高いと想定されます。

(3) 発掘調査で判った関津城の性格と構造

- ① 在地土豪の城郭において主郭（近世城郭の天守に相当）の内部構造が明らかとなったのは全国的にも少ない調査事例です。また、門の位置、建物配置や推定される建物構造から、建物は戦闘に備えたものとは一概に言いきれないことが明らかとなりました。

- ② 土塁・切岸・虎口は、戦国期城郭（土造り城郭）の防御機能の高さを具体的（視覚的）に明らかにした希有な調査事例です。
- また、城郭は、「土造りの城郭」から「石造りの城郭」に発達したと捉えられてきましたが、今回の発掘調査により、土作り城郭の高い防御性が具体的に判ったことにより、土造りの城郭が石造りの城郭に「劣る」とは一概に言えないことが明らかとなりました。
- ③ 戦国期の城郭内から、土蔵が構造や収納物が判る状態で見つかったのは全国的にみても初めてです。また、この土蔵は、建物の基礎（地覆石）、壁構造、内部構造（柱間）や柱の寸法が判明するため、我が国の倉庫建築の変遷を考える上での貴重な資料と評価できます。
- ④ 曲輪の利用形態が、遺構、遺物の双方から具体的に想定できます。第1調査区の曲輪は、出土遺物が日常雑器であるため家臣あるいは使用人の居住空間、第2調査区の曲輪は、財を納めた倉、井戸を伴う厨房、酒倉など用途の異なる建物が整然と配置され、未調査部分では主屋建物や庭園などが推定されるため、宇野氏の屋敷（居館の中心）であったと想定されます。また、この曲輪の上段に位置する土蔵は、自らの富（経済力）を視覚的に見せる効果を期待して目立つ位置に配置したと考えることができます。
- ⑤ 主郭（山城）と居館の位置関係、建物配置、出土遺物から、関津城は山城の機能を包摂した居館（館城）であることが明らかとなりました。
- 今回、調査によって判明した主郭（山城）は、その立地や構造からは戦闘に対する備えを見ることができます。しかし、出入り口（門）の位置、建物の構造や配置からは戦闘に備えた施設とは考え難く、儀礼空間と考えることができます。

戦国期の城郭は、発掘調査事例の増加に伴い、建物遺構あるいは遺物から、城郭内の空間利用が、単なる「戦闘」だけでなく、日常生活、儀礼、接客といった多面的な使い方を想定する必要があると言われていますが、関津城の調査成果はこのことを具体的に証明するものと評価できます。

関津城の調査成果は、城内における日常生活に伴う空間利用の様相が具体的に明らかになったことにより、城郭＝戦闘という一方向的な評価では城郭を理解することができないことを示した点で重要です。

すなわち、城郭の空間利用として「戦闘の空間（櫓台・切り岸・虎口構造）」「褻[ケ]＝日常の空間（今回見つかった礎石建物群、井戸）」「晴[ハレ]の空間（威信、饗応財を用いた空間で未調査部分に想定）」の使い分けされていたことを示しています。

このように、城郭内の空間利用や建物の用途を遺構（礎石建物や井戸）と出土遺物の両面から復元できる事例は非常に少なく、この点においても貴重です。

また、3つの曲輪の全てで、複数回の建物の建て替えが行われたことが確認できました。このことは、生活の場としての館城が維持され続けたことを示しており、館城の利用形態を考える上で重要です。

これまでの戦国時代の城郭研究や発掘調査は、主に守護大名になど有力者に関わるものが中心であり、中小の在地土豪クラスの小規模な城郭（館城）については、全面的に発掘調査が行われた事例が少なく、内部構造や全体構造については表面観察による類推に頼る手段しかありませんでしたが、今回の成果は、小規模な城郭を考えるうえでのモデルケースの一つと評価することができます。

Ⅱ 関津遺跡

1. これまでの状況

関津遺跡は、これまでの調査で、後期旧石器時代の角錐状石器、飛鳥時代の日本最古級の墨書土器、奈良時代の復員 18mの規模を持つ田原道、その沿道に配置された官衙（役所）や田上山作所の関連施設と多種多様な出土品、鎌倉時代の集落と多量の輸入陶磁器や大和（奈良県）から搬入された大量の瓦器、呪符木簡、絵画木板、農具などの木製品、室町時代の港湾施設の一部が見つかるなど、後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっています。

2. 発掘調査の状況

関津城遺跡の北西、道路予定地内の水田において、面積約 1,730 m²を対象として平成 22 年 11 月から発掘調査を実施しています。調査は、平成 23 年 3 月までの予定で現在も継続して行っていますが、検出された遺構や遺物が、今回、発表します関津城と同時期であり、かつ関連性の高い遺構を検出したため、関津城の成果と併せて報告します。

3. 今回の調査成果

調査の結果、江戸時代、戦国時代、鎌倉時代、古墳時代～平安時代の概ね 4 時期の遺構・遺物を検出しました。

(1) 江戸時代の遺構

- ・ 流路（嶽川の氾濫跡）

(2) 戦国時代の遺構

- ・ 区画溝 2 条
 - 南北方向の溝 （規模）残存幅約 5 m、残存深さ約 1.5m、検出長さ約 20m
 - 東西方向の溝 （規模）残存幅約 5 m、残存深さ約 1.5m、検出長さ約 30m
- ・ 井戸 2 基
 - 素掘り井戸 （規模）直径約 1 m、残存深さ約 3 m
 - 石組み井戸 （規模）直径約 2 m、残存深さ 5 m 以上
- ・ 木樋（導水管） 2 基
 - 溝内設置の木樋 （規模）長さ約 2.5m、直径約 50 cm
 - 溝肩部埋設の木樋 （規模）長さ約 2m、直径 20～30 cm
- ・ 石段（水場へのアプローチ） 2 基

(3) 鎌倉時代の遺構

- ・ 木組み井戸 1 基

(4) 古墳時代～平安時代の遺構

- ・ 流路および沼沢地跡（嶽川の旧流路あるいは後背湿地）

出土遺物により時期が判る遺構は以上のものですが、このうち、戦国時代の遺構が注目すべき内容をもつと考えられます。

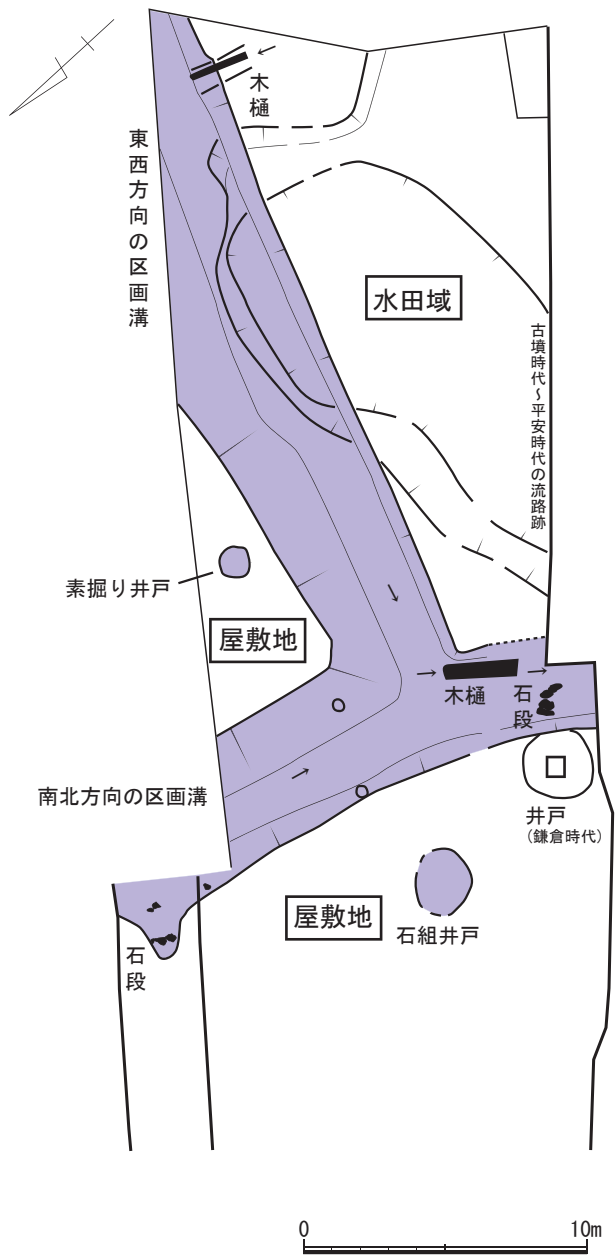
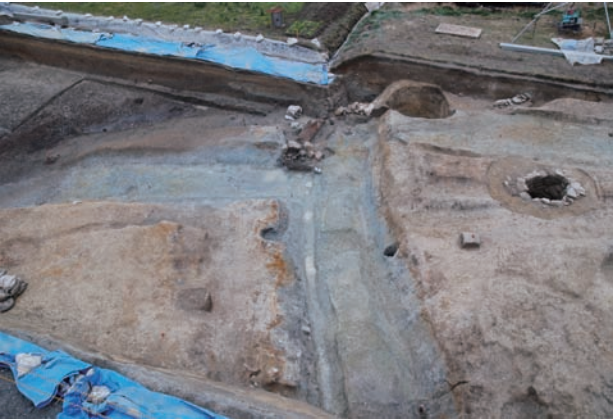


図4 関津遺跡 主要遺構図



関津遺跡 東西方向の区画溝 (戦国時代)



関津遺跡 南北方向の区画溝 (戦国時代)



関津遺跡 木樋と石段 (戦国時代)



関津遺跡 鎌倉時代の井戸



関津遺跡 屋敷地内の石組井戸 (戦国時代)

4. 戦国時代の遺構について

南北方向の溝、東西方向の溝の両者とも部分的な検出のため全容は判りませんが、両者とも同規模であり、直線的かつ人工的に開削されています。また、溝の内面形状や埋没状況からは、複数回の改修を受けた状況も看取できます。そして、溝の南側は江戸時代の流路の開析を受けているため判りませんが北側と西側にはともに平坦地となっていることから、この2条の溝は区画する機能をもっていたと判断できます。さらに、平坦地には溝と同時期の井戸があることから、この平坦地は屋敷地と想定できます。

南北方向の溝には、東西方向の溝の連結部分や下流側に木樋が設置されています。この木樋は内部が空洞であることから、パイプ（導水管）としての役割を果たしていたと考えられます。この木樋は、溝の埋没過程において埋設されていることから、溝内の表面流水が得られない時に、伏流水を得るために設置されたと考えられます。そして、この木樋の排出口部分には、溝の西肩部から溝内に向かって石段が設置されています。そのため、この石段を降りた地点が洗い場あるいは水汲み場であったと想定されます。

東西方向の溝の肩部には、南北溝の木樋に比べ口径の小さい木樋が埋設されていますが、この木樋は、その設置角度から溝内への排水を目的として埋設されたと考えられます。そして、溝の南側は河川の埋没によって形成されていることを考慮するならば、溝の南側は水田として利用されていた可能性が高いと考えられます。

以上のことから、今回の調査地点では、大規模な溝により区画され、井戸を伴う屋敷地と水田が形成されていたことが想定できます。さらに、区画溝は、土地を区画するだけでなく、生活用水や得るための水路として、また、水田の用排水路として利用されていたことが明らかとなりました。

そして、区画溝と屋敷地は、時期が関津城と同時期（16世紀・戦国時代）に形成されていることから、関津城の山麓に展開する集落の一部と判断されます。

4. まとめ

戦国時代の集落は、その大部分が現在の集落あるいは宅地とほぼ重なる位置に形成されていることが多いと考えられています。言い換えると、安定した地形に形成された戦国時代の集落においては、その上に現集落あるいは宅地があります。そのため、面的な調査が行われるケースが少なく、同時に住宅の建て替えや耕地の改変に伴う損壊を受けている場合が多いことから、戦国時代の一般集落の様相は良く判っていません。このことと相まって、守護（戦国）大名クラスの城や城下町については研究が進展していますが、地方の中小土豪クラスの城や山麓の集落、城と山麓の集落との相関関係については実態が不明な状況です。

今回の関津遺跡の調査成果は、城下に展開する集落の様相を垣間見ることができる事例と位置付けることができます。さらに、関津城遺跡の調査成果により中小土豪の城についてもその構造を明らかにすることができました。

両者の調査成果は、表裏一体の関係にあることから、城郭研究のみならず、集落景観の復元や中小土豪の動向を考えるうえで貴重な資料を提供したと評価することができます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりまして、地元関津町の方々、関係機関の皆様には、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。